林檎停通信

長野県北安曇郡松川村

町田　登・幸子

NO.144　2014.6.8

私どもの母親、百江さんが５月15日の夜静かに85才の人生を閉じました。

自分が望んでもいなかったと思われる終末医療の胃ろうという処方で５年もベッドでの寝たきりの状態になり、ただ生きているだけの生命でした。

振り返れば、意識を失った時点で、医師にどうしますかと問われたときに、私はできるだけのことをして欲しいと答えました。あたりまえのやさしさと思ったのですが、結果的には私の知識不足の証明でもあったようで、その判断がまちがっていたのではないかと、月日が経過するごとに自分を責めるようになりました。

これまでの介護はデイサービスとかショートステイとかの施設の世話にもなったが、ほとんど幸子さんと息子の嫁さんの自宅での介護が主流でした。私は常日頃、世の中客観的に見なければ物事の理解に欠けるなどと、主観でものを言う性格なのですが、いざ現場の介護という状況に置かれたときには全くの無力でした。すぐそばに手をさしのべてくれる人がいたから私のていたらくも通ったのです。これは言い逃れかもしれませんが、感謝の言葉もうまく言えません。ありがとうございました。

百江さんは町田家のために養子縁組で家を継いだ。たしか 19 才であったと思うが、その若さは今ならまだ夢を追い続ける年齢だ。当時の世情がそうだったとしても、あまりにも選択肢の自由がなかった時代だとものごころついてから不思議にさえ思っていた。59 才で死んだ父親もたぶん同じ運命だったような気がしています。

私の生まれた時代背景からしても、長男が後を継ぐのがあたりまえという世相でしたが、それにのせられたにもかかわらず、どこでどう狂ったのか不遜な息子となり両親の願いはもろくも崩れたようです。そんなことを引きずりながら前へ進むしかないと今の今まで生きてきました。

それぞれの生き様、それぞれの歴史は自分たちが創造するものであり、その中の最少単位は家族であると私は今思っています。それでもそんな小さな細胞でも分裂してしまうのが現実です。何故でしょうか。私には答えを出す資格がないかもしれません。

宮沢賢治という人は自分の死の直前に、オキシフルで自分の身体をきよめて 39 才の生涯を閉じた。あの人が好きだからあの人のような生き方をしたい、だがそうは生きられないのが凡人の姿です。そんな凡人が少しでもあの人に近ずきたいと思うのが私の小さな答えです。

私どもは人さまと比較して、かなり異質な環境でお互いをみつめ合ってきました。ですから同じ結末を迎えようとは決して考えません。たぶん私どもをよく知る人には、理解していただけると思いますが、あたりまえの形式を削除して、百江さんの最後を家族葬としました。これまで多くの皆様にお世話になり、こんな形での報告は失礼とも思いますが、百江さんの旅の重さをかみしめながらこれからも生きていきますので、どうか御理解の上、今後もよろしくお願いいたします。　　町田　登

以上は親戚縁者に報告した手紙の内容です。長いおつきあいをして頂いている方の中には百江さんを知る人もいらっしゃるので今回通信に載せました。

西陽の入る和室でのベッド生活５年。今年はヨシズに変えて何かを植えて日除けにしたらと幸子さんが言うので、ゴーヤにしようかアサガオにしようかと迷ったが、アサガオのほうが馴染みだろうと思い何本か植えた。だが、残念ながらその花を見ることもなく亡くなってしまった。　私は冷淡なのか涙もながさずたんたんと次の準備にとりかかった。身寄りのない知人の死後のことを二度手がけていたのであれこれとたやすいことだった。性格的に儀式は好まざるに近い方なので物理的なこともあってすべて簡単に済ませた。本来死者のための儀式であると理解はしているが、人様以上に形が好きだった百江さんに対して、最後も期待に答えられなかった。やっぱりごめんなさいですね。

５月の連休中に東名高速道路での事故で同級生が死んだ。兵庫からの里帰りだった。新聞記事は片すみの小さなものだった。　彼の親父さんからいただいた白と赤のボケの花が満開のときだった。

人、ひとりの人生は重いも軽いもないと常日頃思っているが、こういった死によって改めて生命の尊さを肝にめいじています。

花は花、たった一輪の花にでも思い出は残る。人工的なマスゲームみたいな広い花畑を歩く人の楽しげな姿をたまに画像で見ることがあるが、その人たちには生かされている現実しかないのではないかと思う。　そんな花畑で生命をおとすような世情が広がりつつあるのは確かだ。絵にも描けない政治家の顔を私たちはもっともっと疑視追求しなければと考えるのだが。

斗うロッキーの前歯がまた欠けた。耳も補聴器をつけなさいと周囲の人たちにさとされる。視力も老眼鏡の度の強さが増す。だんだんと日光の三匹の猿に近くなるようだ。それでも神経痛が回復したようで、モデルのような歩き方ができるようになった。ふくらはぎの指圧が効果あったのか、異状な熱さによるものかよく解らないが、これは嬉しい現象です。足腰が弱くなると、同時に惚けが始まるとも言われますが、まだ自分には目的がたくさんありますのでその点はだいじょうぶだろう。農薬を必要としない品種の開発もそのうちのひとつです。研究室はりんご畑です。また今年もたくさん種を播いた。我が“れら”に続くもうひとつふたつの品種を作るのだ。時は何年も必要としますから途中でのバトンタッチもやむをえないと覚悟している。まず惚けることはないと思うが、そのときはやさしくお願いします。

さて、今年のりんごの状況ですが、花が咲いた樹はまんべんなく実を付けています。実力以上に昨年実を付けた樹はパラパラの状態で、毎年のことなのでそう気になりませんが、品種により病気に弱いものはなりきの対処が必要なのでしょう。

今年も信州大学の学生諸君が24人、泊まり込みで摘果作業に来てくれた。初いういしい一年生も混じって、　夜は楽しい焼肉パーティーだ。将来の夢はとか、安倍政権をどう思うかとか親父顔して問うかと思ったが、　アルコールのまわりが早くてまたまたバタンキューでした。

今月いっぱいは摘果作業が続き、　その間にモモの袋掛けをします。よほどの災害がないかぎり収量予想ができますので、毎年のことですが予約注文書をお届けいたしますのでよろしくお願いします。　私たちのりんご園は解放区です。　いつでもあそびにおいで下さい。お待ちしております。

まほろばだより
No.3945 14-105 8/1